

'70年代タミヤ1/35MMシリーズの世界

MAMI

セブンスペース

大日本絵画

MASAHIRO DOI
土居雅博



'70年代タミヤ1/35MMシリーズの世界

MMI

セブンティーズ

MASAHIRO DOI

土居雅博





Photo / 大村祐里子

1960年代後半に小学校低学年だった私は週に何回かは町の駄菓子屋や文房具屋でプラモデルを買っては作るいわゆる「模型少年」でした。袋入りの10円キットからはじまっているいろいろなプラモデルを作っていました。その中でも大好きだったのはイマイのサンダーバードでした。サンダーバードは1965年にイギリスで作られたSF特撮人形劇で、主役たちが乗るスーパー救助メカが大人気で、プラモデルがたくさん発売されていたのです。そのメカの中でも私はサンダーバード2号のコンテナから出てくる履帯付きのメカがお気に入りでした。地面の凹凸に合わせて動く転輪や車体に施されたウェザリングがリアルで、今思うとその辺りが私が戦車好きになった原点かもしれません。そのころ、親戚のお兄さんと遊んだりモコン戦車——確かロンメルだったと思います——でタミヤの戦車プラモデルとは出会っていましたが、とくにタミヤ製品だとは意識していませんでした。

1971年、10歳の私は北海道東端の根室市という漁港の町に引っ越しました。転校早々にできた友達の影響で地元の模型屋に通い、本格的にプラモデルを作るようになっていました。そのときに出会ったのがタミヤのミリタリーミニチュア（MM）シリーズです。駄菓子屋プラモデルに毛の生えた程度のキャラクターモデルが多かった中で、タミヤのプラモデルはそれらとは一線を画す魅力を放っていました。ごちゃごちゃとした箱絵やロゴが描かれた箱が積まれていた模型屋の棚でMMシリーズのコーナーだけが白ベースのすっきりとしたデザ

インに赤青のツインスターマークの箱がカッコよく、大人っぽい雰囲気を醸し出していたのです。当時憧れたタミヤの戦車シリーズは600円とか800円でしかもモーター別売でそう簡単に買えませんでした。MMシリーズは人形3～4体セットで80～100円、軍用乗用車が200円という子供でも買える値段だったのも大きかったと思います。最初に作ったMMキットが何だったかは少々あやふやですが、多分キューベルワーゲンだったと思います。戦争映画でもよく見たカクカクしたメカニカルな雰囲気の乗用車がカッコよく、さらに乗員ふたりと将校の人形まで付いていてそのまま組み立てて並べるだけでモーターで動かなくても楽しめたことをよく覚えています。

毎日のように模型屋に通っていたその年のある日、今まで見たことのないちょっとだけ大きめの箱がMMシリーズの棚に並んでいました。それがシリーズNo.9のII号戦車F/G型です。それまでの6ポンド砲やシュビム／キューベルワーゲンもそうでしたが、モーターで走らないディスプレイモデルの戦車と人形を組み合わせて場面を作るというシリーズの基本コンセプトを最初に前面に押し出したのがこのII号戦車でした。戦車と人形を組み立てて並べただけで目の前に北アフリカの砂漠が広がったときの感動は50数年の時を経た今でも鮮明に思い出されます。II号の説明書の影響で、その年にフジ出版の単行本で上下2段組で350ページ以上ある『砂漠のキツネ』を読破するほどアフリカ軍団が大好きになりました。余談ですが、その後何年間かは新しく買ったMMキットは全てサンド色に塗られてアフリカ戦線に投入されることになりました。そして数ヶ月後にNo.11のIII号戦車M/N型が発売されました（No.10のドイツ将校セットはIII号戦車のキットにセットされた人形の先行発売）。II号戦車

とIII号戦車の続けての発売は、MMシリーズがそれまでのモーターライズの戦車シリーズに代わってタミヤのミリタリーモデルのメインストリームとなる道を拓いたのです。タミヤニュース、タミヤ総合カタログ、パッチ特集号などの出版物を通販で購入するようになったのもこの年からでした。

1971年に発売されたII号とIII号では車体下部パーツがモーターライズも考慮された仕様でしたが1974年に入ると純粋なディスプレイモデル仕様の戦車も増えてきて、翌1975年にはそれまでのモーターライズ戦車シリーズからギアボックスなどを取り外してディスプレイモデルとしてMMシリーズに編入されるキットも出てきました。それからも分かるように、このころにタミヤのミリタリーモデルの主力がモーターライズの戦車シリーズからディスプレイモデルのMMシリーズに移り変わったのだと思います。ちなみに完全新型で戦車シリーズから発売されたキットは1972年のKV-1が最後で、一部改修も含めての最後の戦車シリーズのオリジナルキットは1975年に発売されたM10でした。

1971年のふたつのMMシリーズ戦車キットとの出会いは文字通りの意味で私の人生決定づけるものでした。その後の中学校生時代にバンドなど他の趣味もやりましたが、それでもずっと戦車模型を作り続けてきて間が開くことはありませんでした。それから20数年後戦車模型専門雑誌『アーマーモデリング』を創刊することになるのですが、その話はまた別の機会に……。

1961年生まれ、東京都在住。フリーランスのライター兼モデラー。『月刊アーマーモデリング』（大日本絵画／刊）の初代編集長。現在は俳優・石坂浩二氏主宰のプラモデルクラブ「ろうがんず」に所属しており、スケールモデルを中心に精力的に活動している。さらに各地の模型イベントに参加、審査員を務めることも。



SECTION.1

黎明期 1968 → 1973

- 006 ドイツ88mm砲(オートバイ付)
- 013 ドイツ・II号戦車 F/G型
- 018 ドイツ・III号戦車 M/N型
- 024 ドイツ・III号突撃砲G型戦車
- 030 U.S.ジープ・ウイリスMB
- 035 ドイツ・水陸両用車 シュビムワーゲン
- 040 ドイツ・ハノマーク兵員輸送車
- 045 ドイツ ケッテンクラート

SECTION.2

成長期 → 1974

- 052 ドイツ8輪装甲車Sd.Kfz.232
- 058 アメリカ M113 装甲兵員輸送車
- 063 ドイツ歩兵 機関銃チームセット
- 068 アメリカ軽戦車 M3スチュアート
- 073 イギリス S.A.S.ジープ

SECTION.3

高度成長期 → 1975

- 084 ソビエト戦車 T34/76 1942年型
- 089 アメリカ軽戦車 M41 ウォーカーブルドッグ
- 094 ドイツ・75mm対戦車砲
- 099 ドイツ無線指揮車 フンクワーゲン
- 104 ソビエト・重戦車 KV-II ギガント
- 108 アメリカ M3A2 パーソナルキャリアー
- 114 日本陸軍97式中戦車 チハ

SECTION.4

安定期 1976 → 1979

- 122 イギリス チャーチルクロコダイル戦車
- 127 ドイツ・フィールドキッチンセット
- 132 ドイツ ホルヒ1a&20mm対空機関砲

002 はじめに

- 004 Column1 MMシリーズの出発点
- 050 Column2 「作りやすさ」の源
- 078 Crosstalk 松井康真×土居雅博「模型史におけるMMの功績」
- 120 Column3 取材と、技術と、情熱と
- 137 Crosstalk 柴田和久×土居雅博「MMの魅力の本質とは」
- 142 おわりに



MMシリーズの出発点

①

1/35 MMシリーズの前身となる、モーターライズのパンサー戦車がモーター・ギヤーボックスと単2乾電池2本搭載で、そのサイズをのちに調べたら、1/35ほどだったと、田宮俊作社長(当時)が初期のタミヤニュースで述懐されています。

1962年1月に発売した初のオールプラスチック製の動く戦車モデルは、起伏をモリモリと乗り越える走りっぷりで少年たちの心を捉え、大ヒットします。しかし、当時の実車資料は外国書籍に頼る、それもわずかな角度の写真ばかりでスケールモデルを探求する俊作氏には到底、満足できるモノではありませんでした。

パンサー戦車の大成功に矢継ぎ早に製品開発を進めるタミヤに4年後の1966年春、大きなチャンスが巡ってきます。米国視察の流通業者さんに同行した後、知人から聞き得たアメリカのアバディーン戦車博物館を初めて訪れたのです。企画開発部の橋本健次郎氏も同行しました。その地に初めて降り立ったときの驚きは、後日談として何度も語られていますが、1968年入社した僕自身もそれから4年後、同地を訪れるチャンスに恵まれます。その圧巻の実車展示の数々をカメラに収めることができ、その後の製品開発にどれだけ役立ったことかと。俊作氏の取材成果は、まず1/25スケールのデラックス戦車シリーズのパンサー戦車に表れます。取材からわずか8ヶ月後の製品化で、新機軸を盛り込み、しかもスケールモデル然とした橋本氏設計担当のこのモデルは、その1年前までの1/21スケールの同戦車シリーズとは一線を画すものでした。さらにその翌年1967年10月には、田宮督夫氏デザインのホワイトパッケージに迷彩塗装もリアルな大西将美画伯の原画で飾られた1/35モーターライズの『キングタイガー』が発売さ

れます。アバディーンでの取材成果がこのスケールにも初めて投影され、まさにMMシリーズ開発への狼煙が上がりはじめたのです。その4ヶ月後の1968年2月には、タミヤ初参加のドイツのニュルンベルクトイフェアが開幕、あの1/12ホンダF1が衝撃的なデビューを果たし、しかも国内販売したばかりの1/25スケールの新鋭チーフテン戦車がデラックス戦車モデルとしての存在感を誇示、怒濤の開発ラッシュは、海外でのタミヤの知名度を大きく広げていきます。

話は前後しますが、先の『キングタイガー』それに続く『ハンティングタイガー』のモデルには、その後のMMシリーズとは異なる加工方法の

人形が付属していましたが、1967年頃から立体縮小加工という新たな人形製作技術に挑戦し、それを具体化したのが、1968年9月発売の『ドイツ戦車兵セット』でした。当初はリアル感を増した動く戦車モデルに新たな人形を乗せたいと多くのファンの方々からリクエストをいただいはじめた企画ですが、これに続くかたちで情景設定目的から戦車脇に配置する『ドイツ歩兵セット』を企画し、この新たなカテゴリーの可能性からシリーズ化を決断します。そしてこのとき、まさに、展示して楽しむ『シュビムワーゲン』という小型軍用車モデルの企画も動きはじめ、今に繋がるMMシリーズの新たな突破口を切り開くことになります。



①②のちにサイズを調べたら1/35ぐらいだったと初期のタミヤニュースにて田宮俊作社長(当時)が語った「パンサータンク」。③MMシリーズNo.1「ドイツ戦車兵セット」。立体縮小加工という新技術が使用されたフィギュアでもあった。④今に続く「車両とフィギュアで情景を作る」というコンセプトが見られた最初のキット。



田村 廣幸

1949年生まれ、静岡県在住。タミヤの1/35 MMシリーズなどの製品を設計していた。退職後、トワイライトモデルを立ち上げ、デカールや荷物など情景用の小物アクセサリを開発、販売。『月刊アーマーモデリング』(大日本絵画/刊)にて設計者時代に経験したことなどを語るコラム「プラモ人生 続・夢我夢中」を連載中。

黎明期

1968 → 1973

Panzer Kampfwagen II Ausf. F/G

1/35 MILITARY MINIATURES SERIES NO.9 *COMBAT CREW OF 5 *EASY TO ASSEMBLE



F/G

1/35 ミニチュアシリーズ200番台
ドイツII号戦車
乗員5体・アフリカ軍団が兵4体つき

MILITARY MINIATURES GERMAN ARMY TANK CREW

1/35 IDENTICAL SCALE
ドイツ歩兵セット



MILITARY MINIATURES GERMAN ARMY INFANTRY

1/35 IDENTICAL SCALE
ドイツ歩兵セット



MILITARY MINIATURES 1/35 SCALE U.S. ARMY TANK CREW

TAMIYA



Kfz 120 K2s SCHWIMMWAGEN Pkw.K1 typ82 KÜBELWAGEN



BRITISH ARMY 6POUNDER ANTI-TANK GUN

1/35 MILITARY MINIATURES SERIES NO.10 *COMBAT CREW OF 5 *EASY TO ASSEMBLE



Panzer Kampfwagen III Ausf. M/N

1/35 MILITARY MINIATURES SERIES NO.11 *COMBAT CREW OF 5 *EASY TO ASSEMBLE *EASILY DETACHED PLASTIC TRACK



MILITARY MINIATURES 1/35 SCALE BRITISH ARMY INFANTRY

TAMIYA



MILITARY MINIATURES 1/35 SCALE GERMAN AFKORPS INFANTRY

TAMIYA



STURMGESCHÜTZ III Ausf G

1/35 MILITARY MINIATURES SERIES NO.12 *COMBAT CREW OF 5 *EASY TO ASSEMBLE *EASILY DETACHED PLASTIC TRACK



U.S. JEEP 1/4ton 4TRUCK WILLYS MB

1/35 MILITARY MINIATURES SERIES NO.13 *COMBAT CREW OF 5 *EASY TO ASSEMBLE



German HANOMAG Sdkfz251

1/35 MILITARY MINIATURES SERIES NO.14 *COMBAT CREW OF 5 *EASY TO ASSEMBLE *EASILY DETACHED PLASTIC TRACK



MILITARY MINIATURES 1/35 IDENTICAL SCALE GERMAN PARACHUTER

TAMIYA



MILITARY MINIATURES 1/35 IDENTICAL SCALE GERMAN ARMY OFFICER

TAMIYA



88mm Gun Flak 36/37

88mm Flak 36/37
88mm Flak 36/37
88mm Flak 36/37



B.M.W. R75 GERMAN MOTORCYCLE WITH SIDE CAR

1/35 MILITARY MINIATURE SERIES NO.16 *COMBAT CREW OF 4 *EASY TO ASSEMBLE



MILITARY MINIATURES 1/35 SCALE GERMAN TROOP SUPPLY

TAMIYA



MILITARY MINIATURES 1/35 SCALE GERMAN TROOP SUPPLY

TAMIYA



MILITARY MINIATURES 1/35 SCALE GERMAN TROOP SUPPLY

TAMIYA



Zündapp K5750 BMW R75

1/35 MILITARY MINIATURES SERIES NO.23 *GERMAN MOTORCYCLE



MILITARY MINIATURES GERMAN ASSAULT TROOPS INFANTRY

1/35 SCALE
ドイツ歩兵セット



MILITARY MINIATURES GERMAN ARTILLERY TROOPS

1/35 SCALE
ドイツ砲兵セット



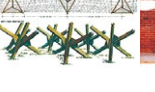
MILITARY MINIATURES BRITISH EIGHTH ARMY INFANTRY DESERT RAT

1/35 SCALE
イギリス第8軍団歩兵セット



MILITARY MINIATURES 1/35 SCALE BRITISH ARMY INFANTRY

TAMIYA



MILITARY MINIATURES 1/35 SCALE BRITISH ARMY INFANTRY

TAMIYA



BRITISH INFANTRY TANK MK.II MATILDA

1/35 MILITARY MINIATURES SERIES NO.24 *COMBAT CREW OF 5 *EASY TO ASSEMBLE



Sd.kfz2 KLEINES KETTENKRAFTRAD

1/35 MILITARY MINIATURES SERIES NO.25 *GERMAN MOTORCYCLE TRACTOR *COMBAT CREW OF 4 *EASY TO ASSEMBLE



SCOUT CAR DAIMLER Mk.II

1/35 MILITARY MINIATURES SERIES NO.26 *COMBAT CREW OF 5 *EASY TO ASSEMBLE



RUSSIAN FIELD CAR GAZ67B

1/35 MILITARY MINIATURES SERIES NO.27 *COMBAT CREW OF 5 *EASY TO ASSEMBLE



MILITARY MINIATURES 1/35 SCALE U.S. ARMY INFANTRY

TAMIYA



MILITARY MINIATURES 1/35 SCALE GERMAN ARMY TANK CREW

TAMIYA



M M

SECTION.1

1968-1973

黎明期

MM 創世記の “タミヤイズム”を 現代視点で追体験

released in 1972



GER. 88mm GUN FLAK 36/37





◀9体の人形はその持ち味を生かしたままポーズを少しだけ改造して全員登場させた。キットの人形は陸軍の所屬で制服も陸軍のものを再現しているが、上着をフリーガーブルゼ（飛行服）と呼ばれる開襟の短上衣にしてブーツも短いタイプに改造した。砲指揮官のみ乗馬ズボンに長靴とした。それぞれの写真の左側はキットオリジナル。1970年台MMのドイツ軍ヘルメットはシルエットが四角いので、頭頂部周囲を削って丸みをつけるとグッとカッコよくなる。



▲ヒューズセッターは対戦車戦闘では必要ないので当初はこの人形は使わない予定だったがサイドカーの座席が空いていたので座らせることにした。



▲サイドカーの座席に座らせた兵士も開襟フリーガーブルゼに改造して、アフリカコーアセット（1973年発売）からMP40を流用して持たせた。



▲空軍の制服の色は陸軍のフィールドグレーと違ってフィールドブルーだったので、アクリルガッシュのグレイッシュブルーで塗った。



▲砲指揮官の乗馬ズボンはバックスキン製の補強用当て布を塗装で表現してみた。空軍の階級章は手書きが難しかったのでタミヤの別売デカールを使用。



▲レンジファインダーを覗く兵士は下士官としたので襟に白線（トレッセと呼ばれる）を描いた。空軍兵士なのでベルト類は茶色。



▲サイドカーを押す伝令兵はオートバイ兵用ゴムびきコートを着ているので、オリブグリーンに塗ってから若干ツヤを出してみた。



▲説明書に掲載されている大西将美術伯のペン画による兵士イラストはいま見てもカッコよくてワクワクする。

M M
SECTION.1
1968-1973
黎明期

1/35 MM SERIES NO.017

GER. 88mm GUN FLAK 36/37

KIT SPEC:



ドイツ88mm砲（オートバイ付）

タミヤ 1/35 税込3080円
インジェクションプラスチックキット
©タミヤ <https://www.tamiya.com>

3 00点を超えるパーツによる精密再現、砲兵と伝令兵を合わせて9体も付属する人形、冊子状の組み立て説明書、そして販売価格が当時破格の1000円という、全ての面でシリーズ最高峰で発売以降も長くMMシリーズのフラッグシップキットとして君臨したが、MMシリーズNo.17 ドイツ軍88mm砲Flak36/37です。

発売当時1000円という価格は小学生にはおいそれと買える値段ではありませんでした。1972年10月の発売から数ヶ月後、冬休みにお年玉で買ったこのキットの大きな箱を抱えて帰ったときの光景

とワクワク感は50年以上たった今でも鮮明に思い出されます。

アーマーモデリング編集部で久しぶりにこのキットの箱を見たときに「箱が縮んだんじゃない？」と言ったら「大人になったからそう見えるだけですよ（笑）」と返されてそうかと半分納得したのですが、実際に測ってみたら本当に初版箱より一回り小さくなっていました。子供の感覚が案外正しかったこともそうですが、キットの仕様に変化していることにも、半世紀以上にわたって現役キットとして発売されている歴史が感じられます。

「88mm砲は大変細かい部品で作られて

います。はじめにツェンダップオートバイを組み立てて、細かい部品の組立てのコツを覚えてください」という説明書の文章からはじまる組み立てはそれまでのMMシリーズキットとは一線を画す精密さで、当時のMM少年にはなかなかヘビーなものでした。今回久しぶりに作ってその作りごたえを堪能できました。

ディテール再現は現在の目で見ても充分精密なので特別なディテールアップはしていませんが、砲架側面にモールドされている鎖を削り取って金属チェーンに置き換えました。50年以上も発売され続けているキットだけに金型に少々ヤ



レが出ていましたが、各パーツのエッジをきれいに整形することで当時のタミヤ製品の組み立て精度の高さを追体験することができました。

細かい部品を組み立てる練習用としてツェンダップKS750オートバイが付属するのも驚きでした。1972年当時としてはとても精密な仕上がりですが、フェンダーステーをプラ材で再現して実感アップを図ってみました。KS750は大戦中期の最新鋭の重オートバイで、全てサイドカーとして運用されたので、88mm砲と同じ1972年に発売されたBMW R75サイドカーから流用して取り付けました。

砲兵とオートバイ兵を合わせて9体も付属する人形は、このキットの特別感を高めてくれる特徴なので全員をダイオラマに登場させようと考えていました。付属の人形は陸軍の軍装を再現しているのですが、高射砲部隊は基本的に空軍所属でした。説明書に掲載されている空軍砲兵のイラストがカッコよくていつか作り

たいと長年思っていたこともあり、ポーズをできるだけ残したままフリーガールゼ（飛行服）に短ブーツの空軍兵士に改造。兵士の改造作業でネックになったのが2体のヒューズセッターの扱いでした。これは対空射撃の際に砲弾の爆発高度を調整するためのもので、今回のダイオラマのように対地上射撃の際には必要ありません。そこで1体はハンドル操作兵に、座っている兵士は下士官に昇進させてサイドカーの座席に座らせました。

各軍砲兵の軍装解説のためのイラストまで載っている組み立て説明書は当時他のMMキットでは1枚を折りたたむかたちでしたが、88mm砲では全16ページの冊子となっていて、組み立て説明だけでなくイラストや写真を交えた4ページにわたる開発史・戦史解説も画期的だったのです。

戦車やジープといった分かりやすいカッコよさがなく大砲のキットの魅力を伝えるために様々な工夫が凝らされた

88mm砲の説明書は独立した読み物としてもとても魅力的です。組み立てる前に説明書を読むこと自体が楽しみとして成立しているのがMMシリーズの特徴のひとつだと思いますが、この88mm砲はその嚆矢といっても過言ではありません。北アフリカ戦線ハルファヤ峠の戦いのくだりの「高射砲で戦車を撃つのは卑怯ですな」「高射砲以外に撃ち抜けない戦車で攻めてくる奴はそれ以上に卑怯だよ」というやりとりはMM少年たちの心に深く刻み込まれています。

そんな様々な思い出を胸に作ったハチハチですが、当時のMM少年たちが思い描いていた「こんな情景を作りたい」というダイオラマに近づくことはできたでしょうか……。

GER. 88mm GUN FLAK 36/37



ドイツ88mm砲 (オートバイ付)

タミヤ 1/35 税込3080円
インジェクションプラスチックキット
©タミヤ <https://www.tamiya.com>



▲さすがに50年以上も現役で金型が稼働しているのでパーツ表面に目くれや荒れが出ているので合わせ目のパテ処理が必要だった。



▲砲架パーツに一体モールドされている折り畳んだ脚の固定用チェーンを削り取って金属チェーンで作りました。



▲完成した砲の主用部分。射撃管制表示器が円形のFlak36として組み立てた。とても50年以上昔のキットとは思えない精密感と立体感に驚かされる。



▲実感を高めるために台車のフェンダーのフチを薄く見えるように削り込んだ。手前が薄削りしたもので奥はキットのままのもの。



▲完成したFlak36防盾は取り外しが可能なので、取り外して塗装した。台車も極小ビスで着脱可能だが、今回は取り付けられた状態で固定した。



▲黒とオキサイドレッドのサーフェイスで下地塗装した。砲身は砲架から外せるので、別にして耐熱プライマー色のニュートラルグレーで下地塗装。



▲塗装にはアクリルガッシュを使用して、写真の4色を混ぜて基本色のジャーマングレーを作った。パーマネントグリーンは隠し味程度に少しだけ混ぜる。



▲基本塗装が終わった状態。1942年らしさを高めるためにイエローブラウン(アフリカ色)で縞迷彩を施した。水を含ませた筆でチッピング。



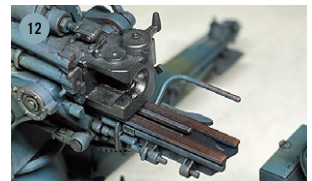
▲基本塗装が終わったらツヤありのクリアーで全体をコーティングしてアクリルガッシュの塗膜保護とピンウォッシュ(スミ入れ)のための下地を作る。



▲Mr.ウェザリングカラーのグランドブラウンでピンウォッシュを施してから、つや消しクリアーを全体に吹き付けてウェザリングの下地を作る。



▲台車や本体の下回りを中心にMr.ウェザリングカラーのグレイッシュブラウンで土・埃汚れを再現。



▲閉鎖機回りと砲架スライドレール部を中心にダークアイアンのピグメントで金属感を表現。自動装填装置のロッドを折り畳んだ状態に改造している。



▲ダイオラマのレイアウトを考える。できるだけコンパクトにして緊迫感を高めるために楕円形のベースにして、マ호가ニー色のスプレーニスで塗装した。



▲100円均一ショップの子供用粘土の茶色と黒を混ぜて地面を作って、粘土が乾く前にタイヤ跡をつけている。地面は無塗装で、ウォッシングをしたのみ。



▲キットに付属するツングダップKS750は大戦中期に登場した重バイクで、実際には全てサイドカーとして運用された。BMW R75サイドカーから側車を流用した。



▲道路脇の背の高い草はフライフィッシングの仕掛けを作るためのオリブ色に染められた鹿の毛を使用し、マットメディウムで地面に接着した。



▲路肩に立てられた看板は1975年に発売されたMMシリーズNo.67道標セットのボックスに印刷されたものを使用。





静岡ホビーショーも間もなくのある日、タミヤ本社の1階・成型工場で、金型製作完成直後の88mm砲の試作が行なわれました。今から54年前の1972年5月、先行で金型製作された砲座周りを構成するふたつの大きなランナー部品で、それまで図面上で記憶する部品群が1/35サイズで見事に配置されていました。小刻みに震える手で、恐る恐る組みはじめました。そして数時間後、その88mm砲が初めての立体モデルとして目の前に現れました。88mm砲を運搬する台車部品は、設計資料不足で作図が遅れ、開幕近いホビーショー展示には残念ながら間に合いませんでした。未完成ながら、それでも初めて見る88mm砲は、ひとりのモデラー目線に戻っても興奮そのものでした。この試作の10ヶ月前、1/72スケールの『ポスパー魚雷艇』の開発を終えて、田宮俊作企画部長（当時）の部屋に呼ばれ「新たな仕事だが、今度はMMシリーズでも大きい企画だ」と突然告げられました。その数年前までは、地元埼玉の模型店さんに足繁く通うプラモデル好きの少年で、動く戦車を作り、タミヤをようやく知りはじめたころでした。そのタミヤが大型（1/21）サイズでアメリカ155mm自走砲M40『ビッグショット』を出していることを知り、さらに少年誌の広告等でそのキット内容を知るにつれ、猛烈にほしくなりました。でも当時の価格1500円は高額で、生まれて初めてのアルバイトをして、ようやく手に入れました。そんな憧れのタミヤに入社し、今、田宮企画部長の前で、心の中で「僕にはとても無理です」とそう叫んでいました。それを見

透かされたように、「描いた図面は私が見てあげるから、ともかく頑張って進めるように」とのお言葉に、目の前に積まれた設計資料と取材した鮮明な細部写真をめくりながら熱く語られました。当時としては、それまでにないほどの貴重な資料でした。席に戻り、ともにポスパーを担当し、この88mm砲企画も援護してくれる1年後輩のAさんといっしょに、これら資料を読み解き、88mm砲開発という、今までにない細かさ（再現を目指す）の火砲モデルの悪戦苦闘の日々がはじまりました。火砲知識などほとんど無いふたり、そして過去の参考となるモデルといえば、まぎれもなく、サイズは違えどM40『ビッグショット』の再現方法と旧アメリカレベ社（現レベ社）の105mmリゅう弾砲のモデルとして漂うフィーリングでした。結果、88mm砲開発の15～16ヶ月間は、どのステージも思い出深いものばかりですが、今までにない組み立て過程のおもしろさを目指し、完成後の動き（遊び）も楽しめるモデルができたかと日々、悩んでいました。当時の熟練金型技術者に若手模型好き図面屋が加わり、そして僕らの少年時代から憧れたパッケージデザインをさらに進化させた田宮督夫氏、そしてこの88mm砲の原画と兵士ポーズ設定を演出された大西将美画伯に心から感謝申し上げます。

そしてこの1/35 MMシリーズがその後60年近く経った今も、多くのファンの方々に支えていただき、モデルの可能性を信じ、熱き情熱を紡ぎ続けた田宮俊作氏が今、心から喜び、そして感謝しておられることでしょう。（田村）

元設計者が語るキットあれこれ

ISBN978-4-499-23447-4 C0076 ¥4000E

定価 (本体4,000円+ 税)



9784499234474



1920076040009



MMI

セブンティーズ

